

七つ森

登場人物 ★は役・スタッフを担当する人

ハヤト ★鷺沢隼人 小学六年生
母 ★猫田裕美
瑠璃姫 ★海野 渚 高校一年生
ヤブレ ★西田サチ 高校一年生
カブレ ★山本大輔 中学三年生
小瑠璃 ★大場真樹 中学二年生

演出・ナレーション ★岸涼子
音響 ★近藤 愛 高校一年生

語り部 1～4(スタッフ)

※人形遣い

七つ森

第一部

◆三週間前

舞台から作業をする音が聞こえてくる。
緞帳が上がると、舞台スタッフが舞台作りをしている。
同時に子どもたちが全員台本を持って劇の練習をしている。
舞台の準備が完成する。

スタッフ1 涼子さん。
スタッフ達 舞台の準備ができました。
涼子 オーケー。それじゃオープニング、ハヤトの台詞から始めるよ。

スタッフが袖に下がる。
オープニングの登場人物(ハヤト、瑠璃姫、ヤブレ、カブレ、小瑠璃)を演じる子どもたちが集まる。
ハヤトと瑠璃姫とその家来が対峙する。
このシーンでは全員が手に持っている台本を見ながら演技を行う。

涼子 愛、音楽入れて。(音楽入る) OK。ハヤトの台詞「この森から出ていって」から。

ハヤト この森から出ていって。
瑠璃姫 私が誰だかわかってるの。
ハヤト (首を振る)
瑠璃姫 私は瑠璃姫。
ハヤト 瑠璃姫?
瑠璃姫 さあ、次はあなたの番ね。あなたの名前を教えて。
ハヤト ハヤト。
瑠璃姫 ハヤト。すてきな名前ね。
ハヤト この森から出ていって。
瑠璃姫 出ていくのは私じゃない。あなたよ。
ハヤト 僕が…
瑠璃姫 (うなずく) さあ、鬼ごっこをはじめましょうか。鬼は私、逃げるのはハヤト、あなた。
ハヤト …
瑠璃姫 逃げないの? (ヤブレとカブレに) 捕まえて。

ヤブレとカブレがハヤトを抑えつける(動きがぎこちない)。
ハヤトは必死の抵抗をする。

ハヤト 瑠璃姫。どうしてお姫様らしく、お城で玉子様と暮らさないの。

凉子 ストップ。

劇が中断する。

凉子 隼人。玉子様って何？

隼人 (台本を示して)ここに…

凉子 よく見ろ、それは「玉子様」じゃない「王子様」だ。

隼人 (あっ！)

凉子 お城に玉子様なんていないわけないだろ。お城といえば王子様。常識だ。

隼人 すみません。

凉子 (全員に) みんないい。もし誰かが間違えたらフォローすること。観客が間違いに気がつかなければそれは失敗じゃない。今のうちから本番を想定してフォローできるようにしておくこと。わかった。

みんな はい。

凉子 さっ、次のシーンにいくよ。愛。音楽入れて。(音楽 I N) オーケー。はい、ハヤトの台詞から。

ハヤト 小島だ、小島がいない。あなた方には聞こえないの、この声が。

カブレ ふふふ、聞こえるよ。小島だけじゃねー。田中も山本もいない。

凉子 馬鹿！(演技がストップする)馬鹿。馬鹿。馬鹿。隼人。小島が泣いてるって何？小島だろう。

隼人 ！

凉子 こんな簡単な漢字、間違えるな。それと大輔。

大輔 はい。

凉子 その後の田中も山本も泣いてるってのは何？

大輔 フォローです。

凉子 森の中で、小島や田中や山本が泣いているんだ。

大輔 はい。

凉子 なるほど不思議な世界だ。

大輔 ありがとうございます。

凉子 馬鹿！森の中で小島や田中や山本が泣いていてどうなる。それから先を言ってみろ。

大輔 …そこまで考えてません。
凉子 そこまで考えてフォローしな。
大輔 …
凉子 隼人、お前何年生だ。
隼人 六年生です。
凉子 六年生?! 六年生なら漢字くらいしっかり勉強しろ。
隼人 すみません。僕、ずっとアメリカで生活していて、日本語を喋るのは大丈夫なんですけど、漢字は今勉強中で。
凉子 次の練習までに漢字に全部ふりがなふってきな。
隼人 はい。
凉子 頭が痛い。今日はここまでにしよう。みんな、帰っていいよ。

みんな、帰ろうとしない。

凉子 どうした。解散、解散だ。

みんなが帰る支度をしに舞台から去っていく。
裕美が現れる。

裕美 凉子ちゃん、お疲れ様。
凉子 裕美、一つ聞いていい、
裕美 何?
凉子 この台本、ほんとに裕美が創ったのか。
裕美 …うん。
凉子 配役を決めたのは?
裕美 …私。
凉子 何であの子が主役のハヤトなの。
裕美 あの子の名前も、隼人だったから。何か、運命的なものを感じて。
凉子 配役変えてもいいかな。
裕美 それは…困る…
凉子 何で。
裕美 それは…
凉子 裕美。演出、私に頼みたいんだろ。それなら配役は私の自由にさせて。
裕美 凉子ちゃん、ごめんなさい。私、嘘ついてた。
凉子 嘘?
裕美 この劇創ったの、本当は私じゃないの。
凉子 裕美じゃない!? じゃ、誰が創ったんだ。
裕美 (うん)

凉子 誰なんだ。

裕美 恵子。

凉子 恵子？

裕美 (うん) 七つ森中で生徒会長だった。

凉子 山口恵子か！？

裕美 (うん) 今は結婚して三浦恵子になってるけど。

凉子 七つ森がレジャーランドになることに反対して、子どもたちを集めて市民芸術祭で劇を上演する。恵子がやりそうなことだ。それじゃ配役決めたのも…

裕美 (うん) 恵子。

凉子 だからあんな滅茶苦茶な配役なのか。恵子に言っといってくれ、自分で始めたことは最後まで自分でやれ。人に頼むなって。

裕美 凉子ちゃん。恵子、入院してるの。

凉子 入院？

裕美 配役決めた後、倒れちゃって。緊急手術で命は助かったんだけど、まだ安静にしてなくちゃいけなくなっ。恵子の後、私が引き継げばよかったんだけど…

凉子 …

裕美 実は、凉子ちゃんに頼めばいいって言ったの恵子なの。でも凉子ちゃん恵子のこと嫌いだから、恵子が始めたって知ったら絶対引き受けないから、私が始めたって嘘つけばいいって。

凉子 何で私に…

裕美 凉子ちゃん今劇団で活躍してること恵子知ってて、(あつ)凉子ちゃんが演出した劇を観たこともあるみたい。凉子ちゃんならきっとすてきな劇にしてくれるって…恵子言ってた。

凉子 恵子のために、この劇をやれてるか？

裕美 恵子のためじゃなくて…七つ森のために。

凉子 七つ森の？

裕美 (うなずく) 私、好きなの、七つ森が。私、七つ森がレジャーランドになってほしくないの。

凉子 …

裕美 凉子ちゃん、凉子ちゃんも七つ森が好きでしょ。

凉子 …

裕美 好きだよ、ね、凉子ちゃん。

凉子 今まで考えたことなかったな、そんなこと…

裕美 凉子ちゃん、七つ森を救ってよ。

凉子 私はスーパーウーマンじゃない。

裕美 でも凉子ちゃん中学の時から、私が困ってる時いつも助けてくれた。だから、凉子ちゃんならできる気がするの。

凉子 演劇ごときに何が出来る。

裕美 …

凉子 あと三週間しかないんだぞ。
裕美 …

劇に出る子どもたちが現れる。

凉子 どうした。
隼人 明日は何時に集合すればいいですか。
凉子 …今日と同じでいい。
隼人 わかりました。
凉子 隼人。
隼人 はい。
凉子 ちゃんと漢字覚えてくるんだぞ。
隼人 はい。

子どもたちが帰って行く。

裕美 凉子ちゃん、ありがと。
凉子 裕美、まだ引き受けるなんて…
裕美 (微笑む)ありがと。
凉子 (大きなため息)馬鹿。

裕美が舞台から去る。
凉子は椅子に座った姿勢で目をつむって考え込む。

◆二週間前

語り部1～4が登場する。

語り部1 さて、一週間で過ぎた。
語り部2 そして今日は、
語り部達 本番二週間前。

語り部達が去る。
凉子のまわりに子どもたちが集まってくる。
凉子は目を開けて、子どもたちを見つめる。

凉子 拷問シーンいくよ。準備いい。
子どもたち はい。

ヤブレとカブレがハヤトを押さえつける。

涼子 四ページはじめ、ヤブレの台詞から。

ヤブレ (かわいらしい演技で) すっかり吐いちゃいな、そうすれば胸の中がすっとするぜ。

涼子 サチ、台本に書いてある瑠璃姫の家来ヤブレのイメージを読んでみろ。

サチ ヤブレは、外見から悪のイメージがふんぷん漂っている。岩をも叩き割るような怪力の持ち主。極悪非道の荒くれ者。

涼子 わかったか。そのイメージでもう一度やって見ろ。

ヤブレ (大きく息を吸って怖くするように努力する、しかし…) すっかり吐いちゃいな、そうすれば胸の中がすっとするぜ(かわいらしい演技で)。

涼子は頭を抱えている。

ヤブレ うんとかすんとか言ったらどうだ。

ハヤト うん。

ヤブレ おめえ、痛い目にあいたいようだな。(カブレに) 針をよこしな。

カブレ あいよ。

カブレが針を渡す。

ヤブレ 指先ってのはな、神経が集まっているのさ。だからこうやって針を突き刺すと。(恐る恐る針を突き刺すまねをする)

涼子 サチ！なんだその演技は。お前が怖がってどうする。これは拷問なんだぞ。

サチ すみません。

涼子 (サチをじっくり眺めて) サチ、小学生のお前にこの役は無理だ。

サチ …私…高校生です。

涼子 高校生？！

サチ すみません…

サチはどう見ても高校生には見えない。

涼子 よし、私が見本を見せてやる。サチ、目ん玉開いてしっかり見てろ。

ヤブレ [凉子] 指先ってのはな、神経が集まっているのさ。だからこうやって針を突き刺すと。

ハヤト (叫び) ※力のない叫びである。

凉子 もっと叫べ。

ハヤト (叫び) ※先ほどの叫びより少し大きくなった程度である。

凉子 それが叫びか。

隼人 …

凉子 隼人、お前はなぜこの劇をやるんだ。

隼人 七つ森を救うためです。

凉子 なるほど、素晴らしい。私も七つ森をレジャーランドにする計画があることは聞いている。劇の上演でそれに反対する。そういうことだな。

隼人 はい。

凉子 で、お前のそのへなちょこ演技で、誰の心が動くんだ。

隼人 …

凉子 七つ森がなくなってもいいのか。

隼人 (首を振る)

凉子 本当にそう思うなら、本気で叫べ。いいか、お前は森の木だ。木が切られる。叫べ！

ハヤト (叫び) ※それは、本物の叫びである。

凉子 よし。よくなった。その叫びを覚えておけ。演技を続けるぞ。

ヤブレ [凉子] どうだ、話す気になったか。

ハヤト …

ヤブレ [凉子] まだ話す気になれないのか。それではこうだ(ハヤトの叫び)。ほら、血が滲んできたぞ。これでもか(ハヤトの叫び)。これでもか(ハヤトの叫び)。

突然、渚が舞台袖から駆けてくる。

渚 (泣きながら) やめて、やめてください。もう充分です、許してあげて。

凉子 渚、これは演技だ。

渚 (泣きながら) 演技には見えません。

凉子 渚。劇の中でこの拷問をやらせているのは、お前が演じる瑠璃姫なんだぞ。

渚 (泣きながら) でも、ハヤトがかわいそうで。

凉子 馬鹿、そんなことを考えていちゃいい劇はできない。

渚 瑠璃姫は、なぜハヤトにこんなつらい仕打ちを。

凉子 なぜだろうな、

渚 (泣いている)

凉子 泣くな。

渚 涙が止まりません。

凉子 (頭を抱えて)続けるぞ。サチ！

サチ はい…

凉子 私の劇団の役者達は私のことを鬼の凉子と呼ぶ。私は鬼なんだそうだ。

サチ わかります(思わずそう言ってしまう、慌てて口に手を当てる)。

凉子 私の鬼のイメージはどこから来てる？私のからだか？そうじゃない。私は怪力の持ち主ではない、でも恐ろしさは出せる。

サチ どうしたらいいんですか。

凉子 自分で考えてみる。これは私の劇じゃない。お前達の劇だ。

サチ …

裕美が慌てて入ってくる。

裕美 凉子ちゃん、困ったことが起こった。それも二つ。

凉子 一つ目は？

裕美 劇、三十分以内でやってくれって。

凉子 三十分！？一時間で創っている劇を、三十分でどうやれっていうんだ。本番まであと二週間なのに。

裕美 三十分を超えたら、そこで終わりにしてもらって。なるべくたくさんの団体を出したいからだって。

凉子 それで、もう一つの困ったことは？

裕美 ハヤトの母役の森田が辞めた。

凉子 なに！

裕美 もう、馬鹿馬鹿言われるのが嫌になったんだって。

凉子 馬鹿が！

裕美 どうしたらいい。

凉子 (しばらく考えて)中止にしよう。

裕美 …

凉子 本番まで後二週間。恵子には悪いが、今は潮時だ。

裕美 代役立てれば…

凉子 それだけで何とかなる状況じゃない。

裕美 …

サチ 凉子さん、劇をやらせてください。私、がんばりますから。

凉子 いいか、芸術祭に出なくても、まだ劇をやるチャンスはある。恵子がよくなってからやればいいじゃないか。

裕美 そうしたら七つ森がレジャーランドになること、決まっちゃうかもしれない。今しかないの。

サチ 私、去年、文化祭で戦争のこと調べたんです。そして、はじめて知ったんです。この町

に空襲があったこと。そして、たくさんの人が死んでしまったことも。でも、七つ森に逃げた人たちはみんな助かったんです。七つ森が救ったんです。

真樹 私のおばあちゃんも七つ森に逃げて助かった一人です。七つ森がなければ私は今ここにいないかもしれないんです。

オオルリの囀り。

隼人 ルリ、大丈夫。森は必ず守るから。

オオルリの囀り。

凉子 隼人。お前、誰と話しているんだ。

隼人 ルリです。

凉子 大丈夫か。

隼人 凉子さんには見えないんですか。あの青い鳥が。

凉子 (隼人が指差した場所を見る) あれか。きれいな鳥だな。

隼人 オオルリっていうんです。僕、あの鳥と話してたんです。

凉子 大人をからかうな。

裕美 凉子ちゃん。ほんとなの。あの鳥、隼人の言葉がわかるの。

凉子 裕美、ここはファンタジーの世界じゃないんだぞ。

渚 でも、隼人、ほんとに話せるんです。私もはじめは信じられませんでした。

隼人 ルリ、僕の言うことがわかるってこと見せてあげて。

オオルリが囀る。

凉子 馬鹿な。

隼人 ルリと僕は友達なんです。

凉子 どうやって友達になった。

隼人 ルリが、森で罠にかかっているのを助けたんです。

凉子 この劇で銀の鷹を助けるハヤトの母親みたいだな。それで。

隼人 それ以来、ルリはいつも僕のそばにいます。オオルリは千キロ以上の距離を飛んできて、七つ森で子育てをするんです。長い長い旅の後、存在しているはずの森がなくなっていたら。僕はルリのためにも七つ森を守りたいんです。

凉子 (ふざけた感じで) 感動的。泣かせる話だなー。

隼人 笑わないでください！

凉子 …

隼人 僕、本気なんです。

凉子 …お前、本物の馬鹿だな。

隼人 …(うつむく)
凉子 うまくなんなよ。
隼人 (えっ)
凉子 うまくなりな。そして、観客を劇に引きずりこむんだ。それが主役の役目だ。
隼人 僕みたいな馬鹿に、できますか。
凉子 お前みたいな馬鹿だからこそ、できる可能性があるんじゃないか。
隼人 がんばります。
凉子 さてと、森田の代わり…どうしたものか…
裕美 凉子ちゃん。ありがと…
子どもたち ありがとうございます。
凉子 馬鹿…

裕美を見つめて。

凉子 裕美。
裕美 …
凉子 裕美がやれよ。
裕美 私が！
凉子 (うなずく)裕美、高校時代ダンスやってただろ。そのダンスが、母が森の中で舞うシーンできっと役立つ。
裕美 でも、ダンスしばらくやってないし、私、昔から失敗ばかりで、何やってもうまくいかなくて…、凉子ちゃんも知ってるじゃない。
凉子 劇、やりたいんだろ。
裕美 …
凉子 七つ森を守りたいんだろ。
裕美 …わかった。
凉子 よろしく。
裕美 (みんなに)私も一緒にがんばるから、よろしくね。

子どもたちはそれぞれの言葉で「よろしくお願いします」と言う。

凉子 ということで、今日はこれで終わりにしよう。解散。
子どもたち はい。

子どもたちが帰る準備をしに舞台から去っていく。
舞台に凉子と裕美が残る。

凉子 さてと、三十分か…(台本を手にとって読む)

裕美 …

凉子 (はっとして) 裕美。

裕美 …

凉子 恵子には悪いけど、劇、少し変えるよ。

裕美 …

凉子 裕美、今から母の台詞を全部覚えるのは大変だろ。

裕美 (うん)

凉子 劇半ばの母のシーンは、劇の案内役をつくって、ダイジェスト版での上演にしよう。裕美は覚える台詞が減る、劇は短くできる。

裕美 劇の案内役って、誰がやるの？

凉子 私がやる。

裕美 凉子ちゃんが…

凉子 それと、スタッフの子達に頼んでみる。語り部として出てくれないかって。

裕美 …

凉子 どうした。

裕美 凉子ちゃん、ありがと。

凉子 (にこっと笑って) わかったんだよ。

裕美 わかった？

凉子 ずっと好きだったってこと。七つ森が。

裕美 (微笑んで) 凉子ちゃん。

ルリの鳴き声。

凉子 (ルリを見つめて) 馬鹿。

裕美は舞台から去っていく。

凉子はうれしそうに椅子にもたれかかり、微笑んでいる。

そして、眠ってしまう。

◆前日

語り部 1～4 が現れる。

語り部 1 明日はいよいよ本番

語り部達 今日の本番一日前。

語り部達が去る。

凉子が目を開ける。

凉子のまわりに子どもたちが集まってくる。

凉子 それじゃ、母がハヤトに自らの命を与えるシーンいくよ。愛。

愛 はい。

凉子 このシーンにあった音楽搜しといてくれた。

愛 はい。母と子の愛情にあふれる音楽ですよね。

凉子 そうだ。

愛 ぴったりあった曲を見つけました。

凉子 よーし、それじゃその音楽かけてくれ。

愛 わかりました。

愛が袖に駆けていく。

凉子 音楽スタート。

大音響で森進一『おふくろさん』がかかる。

みんな啞然、開いた口がふさがらない。

『おふくろさん』が響き渡る。

凉子 ストップ！

『おふくろさん』OUT。

愛が出てくる。

凉子 愛、お前は馬鹿か。

愛 …

凉子 仕方ない。ここは音楽なしでいこう。母がハヤトを守って鉄砲で撃たれるところから通してやるよ。

隼人達 はい。

凉子 愛、鉄砲の音、準備して。

愛 はい。

愛が音響の準備に袖に向かう。

ハヤト、その母、瑠璃姫、ヤブレ、カブレ、小瑠璃が準備をする。

凉子 とにかく、失敗するんじゃないよ。

愛(声) はい。

ハヤトと瑠璃姫が対峙する。
ハヤトの後ろに母が、瑠璃姫の後ろに家来が立つ。

凉子 さあいくよ。瑠璃姫の台詞から。

瑠璃姫 カブレ、撃つのよ。

そこで鉄砲の音。

凉子 馬鹿！早すぎる。カブレがまだ鉄砲をかまえてない。

愛(声) すいません。

凉子 もう一度いくよ。準備いい。

愛(声) 待ってください。

凉子 もう待てないの。

愛(声) 準備できました。

凉子 瑠璃姫の台詞から。

瑠璃姫 カブレ、撃つのよ。

カブレが鉄砲を構える。

母 ハヤト！

そう叫んでハヤトの前に母が立つ。

カブレが鉄砲を撃つ。

その瞬間『おふくろさん』がかかってしまう。

凉子 馬鹿。何でここで『おふくろさん』なんだ。

愛 すみません。間違えました。

凉子 愛、今すぐ『おふくろさん』を消しておけ。今すぐだ。

愛 はい。

愛が袖に戻る。

愛(声) (しばらくして)消しました。

凉子 OK。それじゃ、瑠璃姫の台詞から。

瑠璃姫 カブレ、撃つのよ。

カブレが鉄砲を構える。

母 ハヤト！

そう叫んでハヤトの前に母が立つ。

カブレが鉄砲を撃つ。

今度は音が出ない。

演技が止まる。

凉子 愛、どうした。

愛 間違って『おふくろさん』じゃなくて、鉄砲の音を消しちゃいました。

凉子 馬鹿。それじゃこれから音が出せないじゃない。

愛 …

凉子 しかたない、ラストシーン、音なしでいくよ。瑠璃姫の台詞から。

瑠璃姫 カブレ、撃つのよ。

カブレが鉄砲を構える。

母 ハヤト！

そう叫んでハヤトの前に母が立つ。

カブレが鉄砲を撃つ。

凉子 ズドン。ハヤトを守って母が撃たれる。

ハヤト 母さん！

母が倒れる。

ハヤト 母さん！母さん！

ハヤトが母親を抱きしめる。

母 大丈夫。私には命が二つあるの。私はもう一つの命で生きていける。でもね、私は二つ目の命がないと、母の姿でいることができないの。母の姿であなたの前にいられるのは、

これが最後よ。ハヤト、森を、森を頼んだわ。
ハヤト 母さん！
母 ハヤト！

凉子 続けるよ。母は木の後ろに隠れる(母がそうする)。家来が一斉に空を見る(家来達がそうする)。

ヤブレ 銀の鷹だ。

その声に続いて、家来達が「銀の鷹だ」と叫ぶ。

瑠璃姫 あの鷹を。あの銀の鷹を撃ちなさい。

カブレは撃つことができない。

瑠璃姫 何をしているの。あの鷹を、あの鷹を撃つのよ。

カブレ 姫様。あの鷹を撃つのはかんべんしてください。

小瑠璃 姫様、帰りましょう。銀の鷹の棲むこの森は諦めましょう。

瑠璃姫 ハヤト、これですべてが終わったなんて思わないでね。私はまた戻ってくる。必ずここに戻ってくるわ。

家来達が瑠璃姫を連れて森から去る。

ハヤト 母さん、安心して。これからどんなことが起きても、僕がこの森を守るから。必ず守るから。

ハヤトが去っていく。

凉子 そして、最後に私のナレーションが入る。

ナレーション [凉子] こうして七つ森に再び平和が訪れた。しかし、安心はできない。瑠璃姫は今でも、森を奪い取るチャンスをうかがっているのだ。森は生命のあふれる場所。森はそれ自身が一つの大きな生命だ。そんな森を瑠璃姫の魔の手に奪われることがあってはならない。

凉子 はい、ここまで。

子どもたちが舞台に集まってくる。

渚が大きなため息をついてひざまずく。

凉子 渚、どうした。

渚 私、瑠璃姫の世界が創れません(泣き出す)。

凉子 どうしてお前はそうすぐ泣くんだ。

渚 瑠璃姫がかわいそうで…、家来達は心を入れ替えるのに、瑠璃姫だけは最後まで残酷なまま。演じてて泣きたくなくなります。

凉子 馬鹿、瑠璃姫が泣いてどうなる。瑠璃姫は涙を知らない少女だ。

渚 瑠璃姫は泣いたりしないんですか。

凉子 そうだ。お前とは正反対の泣かない少女だ。

渚 私、世の中に瑠璃姫のような悪い人がいるなんて思えないんです。

凉子 この世の中、瑠璃姫程度の悪人ならいくらでもいる。

渚 そうでしょうか。

凉子 私もその一人だ。

渚 凉子さんが？

凉子 そうだ。悪魔と呼ばれたこともある。

渚 悪魔？凉子さんが悪魔なんて、(そう言って、はっとする)悪魔…そうだ、悪魔だ、瑠璃姫は悪魔に育てられたんだ。そしてひどい陰湿ないじめにあって、愛することも涙を流すことも知らずに育った。凉子さん、ありがとうございます。瑠璃姫の世界が創れそうです。(独り言で)瑠璃姫は生まれてすぐ悪魔にさらわれた、そして悪魔に育てられた。それで…

渚はそうつぶやきながら舞台を去っていく。

凉子 さあ、最後のため出しだ。隼人。

隼人 はい。

隼人が袖から出てくる。

凉子 母さんに決意を言うところ、まだ感情がこもってない。もう一度そのシーンをやるよ。

隼人 はい。

隼人が準備する。

凉子 それじゃ、いくよ。ハヤトの台詞から。

ハヤト 母さん、安心して。これからどんなことが起きても、僕がこの森を守るから。必ず守るから。

凉子 そんなに苦しそうに言うな。もっと心を込めて。もう一度。

ハヤト 母さん。安心して。

凉子 もっと明るく。

ハヤト 母さん。安心して。僕、僕… おなかが痛い（うずくまる）。

凉子 台本にない台詞を言うな。明日は本番だぞ。さっ立って…

凉子は隼人の腕をつかんで立たせようとする。

凉子の顔色が変わる。

凉子は隼人の額に手を当てる。

凉子 すごい熱だ。

裕美がかけてくる。続いて、子どもたちが集まってくる。

凉子 なぜ黙ってた。

隼人 大丈夫です。

凉子 大丈夫じゃない。とにかくすぐ病院に行け。

隼人 僕、ルリと約束したんです。劇を成功させるって。そして七つ森を守るって。こんなの…なんでも…な…い…

凉子 もう喋るな。

オオルリの鳴き声。

隼人 （立ち上がってルリのいる方に歩いていく）ルリ、大丈夫。約束通り、七つ森は…守るから、必ず…守るから…（そう言って倒れる）

凉子 隼人、隼人。

隼人 守るから…、必ず…守るから…

凉子 裕美、救急車呼んで。

裕美 わかった。

裕美が駆けて舞台から出ていく。

暗転

◆本番当日

語り部1～4が現れる
椅子に涼子が座っている。

語り部1 さて、今日は、
語り部達 本番、当日の朝。

突然、涼子が目を覚ます。

涼子 いちいちうるさい。出ていけ。ここから出ていけ。

語り部達が慌てて舞台から去る。
涼子は再び椅子に倒れ込むように座り、寝言で「出ていけ」と言い続ける。
裕美が入ってくる。
うなされている涼子を起こして。

裕美 涼子ちゃん。

涼子 出ていけ！

裕美 …

涼子 夢か…

裕美 夢？

涼子 (ため息) 夢の中に出てくる語り部に怒鳴り散らしてた。

裕美 涼子ちゃんらしいね、夢の中にまで語り部が出てくるなんて。

涼子 それで、隼人は…

裕美 盲腸、かなり悪い状態みたい。たぶん今日、手術することになるだろうって。

涼子 主役、なしか…

裕美 代役、立てて…

涼子 今からか？

裕美 …

二人は黙り込む。

裕美 中止のこと…

涼子 私が伝える。(大声で) みんな、集合して。

子どもたちが涼子の周りに集合する。

凉子 みんなに話がある。もう覚悟はできていると思うけど、今日の劇は残念ながら…
隼人(声) 遅れてすいません。

隼人が走って現れる。

凉子 隼人。お前、盲腸の手術するんだろ。

隼人 誰がそんなこと言ったんですか。手術なんてしません。あれはただの食中毒。もう、なんとありません。

裕美 本当に。本当に大丈夫なの。

隼人 はい。

凉子 こいつ、心配かけやがって。

隼人 すみません(そういつて笑う。その笑いが子どもたちにも広がる)。

裕美 劇、できるのね。

凉子 (うなずく) よーし、始めよう。

みんなが歓声を上げる。

凉子 今日の劇の確認をするよ。まずオープニングの音楽の入りのタイミングだ。私の舞台挨拶が終わって、私がこうやって(礼をする)礼をするのがきっかけだ。音楽が入ったら緞帳が上がって劇が始まる。くれぐれも音楽を入れるタイミングを間違えないように。愛、わかった。

愛 はい。

凉子 みんないい、お前達にしかできない劇をやるんだ。お前達にはそれができる。と言いたいところだけど、昨日の練習も失敗だらけ。さて、そこで失敗対策なんだけど、とにかく間違ったら、誰かがうまくフォローして劇を進めていくこと、それだけ頭にたたき込んでおけ。いいな。

みんな はい。

凉子 よーし。みんな円陣を組め。

みんなが凉子を中心にして円陣を組む。

凉子 さあ、いよいよ本番だ。いくぞー。

みんな オー。

緞帳が下りる。

第 二 部

本ベルが鳴る

緞帳の前に涼子が出てくる。

涼子 こんにちは。演出担当の岸涼子です。本日は私達の劇『七つ森』を観にきていただきありがとうございます。みなさんもお存じの通り、この七つ森は…(ここで思わずくしゃみをしてしまう。そしてくしゃみとともに礼をしてしまう)失礼。

そのとき突然オープニングの音楽がかかる。

涼子 ！

涼子は音響室に×のサインを送り、音楽を止めるように合図。

その後ろで緞帳が上がっていく。

舞台に創られた七つ森が現れる。

涼子 馬鹿。どうして…

もう劇を始めるしかない。

涼子 (慌てて) 舞台の準備が整ったようです。それでは劇を始めるといたしましょう。『七つ森』、どうぞごゆっくりお楽しみください。

涼子は下手袖近くに腰を下ろし、物語の案内人となる。

ナレーション [涼子] ここは、七つ森。^{いのち}生命あふれる美しい森だ。ある日この森にお姫様がその家来を引き連れてやってきた。そのお姫様、名前を瑠璃姫という。瑠璃姫はこの森の木々を全て切り倒し、そこに彼女が一年中遊ぶことができる遊び場を造ろうとしていた。

瑠璃姫がヤブレとカブレ、そして小瑠璃とともに森に現れる。

小瑠璃 姫様、ここが七つ森です。

瑠璃姫 うっとうしい森。小瑠璃、こんな森、早くなくして。

小瑠璃 この森には守り神がいて、簡単に手を出すことができないのです。

瑠璃姫 守り神？

小瑠璃 はい。

瑠璃姫 見て、あれは何かしら。

ヤブレ なんだ、あれは。
カブレ 鷹だ、鷹だぞ。
ヤブレ なんて優雅に舞ってるんだ。
カブレ 夢のように舞っている。
小瑠璃 姫様、あれは銀の鷹。この森の守り神です。
瑠璃姫 小瑠璃、あの鷹がいなくなれば、この森を手に入れることができるのね。
小瑠璃 (うなずく)
瑠璃姫 (カブレに) あの鷹を撃ちなさい。

カブレが鷹を撃とうとする。
そこに突然一人の少年が現れる。
少年の名前はハヤト。

ハヤト 撃つな！

そういつて、ハヤトはカブレに体当たりする。
鉄砲の音。
弾はそれたようだ。

ハヤト この森から出ていって。
瑠璃姫 私が誰だかわかってるの。
ハヤト (首を振る)
瑠璃姫 私は瑠璃姫。
ハヤト 瑠璃姫？
瑠璃姫 さあ、次はあなたの番ね。あなたの名前を教えて。
ハヤト ハヤト。
瑠璃姫 ハヤト。すてきな名前ね。
ハヤト この森から出ていって。
瑠璃姫 出ていくのは私じゃない。あなたよ。
ハヤト 僕が…
瑠璃姫 (うなずく) さあ、鬼ごっこをはじめましょうか。鬼は私、逃げるのはハヤト、あなた。
ハヤト …
瑠璃姫 逃げないの？ (ヤブレとカブレに) 捕まえて。

ヤブレとカブレがハヤトを抑えつける。
ハヤトは必死に抵抗する。

ハヤト 瑠璃姫。どうしてお姫様らしく、お城で王子様と暮らさないの。
瑠璃姫 (笑う)

小鳥の鳴き声が響いてくる。

ハヤト 小鳥だ、小鳥が鳴いている。あなた方には聞こえないの、この声が。

カブレが空に向けて鉄砲を撃つ。
小鳥の音がやむ。

瑠璃姫 あなたはなぜ銀の鷹を助けたの。私に話して、あなたが銀の鷹について知っていることを。

ハヤト 知らない。

瑠璃姫 (笑って) 困ったわ。あの銀の鷹について知っていることを喋ってくれないと、私はあなたに対してつらい仕打ちをしなければならない。あなたにそんな仕打ちをするのはつらいわ。だから、話して。

ハヤト …

瑠璃姫 仕方がないわね。(ヤブレとカブレに) いい、話を聞き出して。

ヤブレ どのように。

瑠璃姫 手段は選ばないわ。ただし、殺さない程度にね。(ヤブレとカブレに) さっ、始めて。

そう言って、瑠璃姫と小瑠璃は森の奥に。

ヤブレ 素直に喋ってもらおうか。銀の鷹について知ってることを。

カブレ 喋ってくれば手荒なことはしなくてすむ。

ヤブレ いけねえなあ、秘密をお腹の中にためちゃ。すっかり吐いちまいな。そうすればお腹の中がすっとするぜ。

涼子が立ち上がる。ハヤトとカブレはぎよっとする。
ハヤトが「お腹ではなくて胸」という意味で胸を叩く。

ヤブレ (慌てて) どうしたんだい、何か喉につかえたんかい。それともゴリラのまねかい。

涼子から再びフォローの合図。

ハヤト あなたは、秘密をお腹の中にためるの。僕は胸の中にためるものだと思ってた。

カブレ (慌てて) 普通の奴はそうさ。でもヤブレは違うんだ。ヤブレは秘密を胃袋の中にためる能力がある。そうだよな。

ヤブレ そ、そうとも。びっくりしただろう。

涼子が頭を抱えている。

遂に我慢できなくなり、杖をついて歩いてくる。

演じるのは富山の薬売り。

薬売り 私は富山の薬売り。二人ともいい薬があります。煎じてあげますからこちらにいらしてください。

三人は木の後ろに。

そこで台詞の確認。

三人が木の後ろから現れる。

薬売り さあ、もう大丈夫ですね。

ヤブレ (恐ろしく) ええ、もう間違えません。

カブレがあわてて、ヤブレの口を押さえて。

カブレ もう大丈夫。

薬売り それでは、お元気で。(少し歩いて)私は富山の薬売り。

薬売りはナレーションの位置に。

ヤブレ (突然、恐ろしい形相になって) どうだ、吐く気になったか。

ハヤト …

ヤブレ うんとかすんとか言ったらどうだ。

ハヤト うん。

ヤブレ おめえ、痛い目にあいたいようだな。(カブレに) 針をよこしな。

カブレ あいよ。

カブレが針を渡す。

ヤブレ 指先つてのはな、神経が集まっているのさ。だからこうやって針を突き刺すと。

ハヤト (叫び)

ヤブレ どうだ、話す気になったか。

ハヤト …

ヤブレ まだ話す気になれないのか。それではこうだ(ハヤトの叫び)。ほら、血が滲んできたぞ。これでもか(ハヤトの叫び)。これでもか(ハヤトの叫び)。

ヤブレがハヤトの手を離す。

ヤブレ しぶとい奴だ。

瑠璃姫と小瑠璃が戻ってくる。

瑠璃姫 どう、聞き出せた。

ヤブレ それがなかなか強情で。

カブレ しぶとい奴です。

瑠璃姫 それでは奥の手を使うしかないわね。

ヤブレ 奥の手といいますと。

瑠璃姫 これよ。

瑠璃姫が薬を取り出す。(薬はイメージ)

ヤブレ それは！

瑠璃姫 唐の国より伝わる秘薬。これを飲むとどんな秘密も話さずにはいられなくなる。

ヤブレ そして全てを話した後に、

カブレ 気がふれる恐ろしい薬。

ハヤト 僕、話さない。絶対に…

瑠璃姫 (笑って)それでは試させてもらうわ。(ヤブレとカブレに) この薬を飲ませなさい。

ヤブレ・カブレ はっ。

ヤブレ さあ、飲め。飲むんだ。

ヤブレとカブレはハヤトに無理矢理その薬を飲ませる。

瑠璃姫 よし、よし。さて、それではこれからあなたがどうなるかゆっくり楽しませてもらうわ。

ハヤト (からだが震えてくる)

瑠璃姫 からだが震えてきたわね。次はからだが焼けるように熱くなるわよ。

ハヤト (いかにもからだが熱くて仕方がないという動き)

瑠璃姫 いかが、この薬の効き目は。熱くて熱くてしかたないでしょ。

ハヤト 熱くなんかない。

瑠璃姫 本当に強情ね。そろそろからだがふらふらしてくるわよ。

ハヤト (からだがふらふらしてくる)

瑠璃姫 熱さは遠のき、心地よい気分になってくる。

ハヤト (意識が朦朧としてくる)

瑠璃姫 意識が朦朧として来たようね。それでは銀の鷹について知っていることを私に話してくれる。

ハヤト (朦朧として) あの銀の鷹は、

瑠璃姫 あの銀の鷹は？

ハヤト 僕の…母さん。

瑠璃姫 母さん！？あの銀の鷹があなたの母親だっていうの？

ハヤト (うなずく)

瑠璃姫 興味深い話ね。聞かせて頂戴、あなたとあなたの母さんの話を。

次のナレーションで舞台に語り部1～4が登場する。

ナレーション さすがのハヤトもその薬の力にはかなわず、銀の鷹について話し出すのだった。

語り部1 銀の鷹はハヤトの母親であった。

語り部2 母は森の中でどのようにハヤトを育てたのか

語り部3 その育て方を、

語り部4 どうぞ、ご覧ください。

語り部が舞台から去る。

語りの中でハヤトは舞台前方に歩いていき、そこでひざまずく。

ハヤトの前に母が現れる。

瑠璃姫はそれを眺めている。

舞台上で表現されるのは、瑠璃姫がハヤトの話を聞いて思い描く世界である。

ハヤト もう動けない。

母 なに弱音を吐いてるの。それでも母さんの子？さあ、立って母さんのように動いてごらん。

母が華麗に舞台上を舞う。

次の瞬間、母は転ぶ。

ハヤト 母さん。どうして、母さんのように動けなくちゃいけないの。

母は呆然として、次の台詞がでてこない。

ハヤト 母さん。どうして、母さんのように動けなくちゃいけないの。

涼子から何とかしろという合図が出る。

ハヤト わかった。森で生き抜くためだね。母さん、僕、がんばる。

涼子が薬売りとなって歩いてくる。

薬売り 私は富山の薬売り。腰を打ちましたかな。どれ、よい薬があります。さっ、こちらに、こちらに。

そう言って、母を中央の木の後ろに連れて行く。

母 (木から顔を出して)薬売りさん。ありがとう。もう大丈夫です。

薬売り それはよかった。

薬売りはナレーションの位置まで歩いていき、立ち止まり、振り返る。

薬売り 私は富山の薬売り。

薬売りが、指を鳴らすと、語り部が現れる。

ここからは語り部が語ることを、ハヤトと母があえて人形のように動き、パントマイムで演じる(できれば人形遣いを登場させ、操り人形としてハヤトと母を動かしたい)。

語り部1 こうしてハヤトは森で生きるすべを母から学んだ。

語り部2 その時、ハヤトは母親の正体を知らなかった。

語り部3 「いつ正体を知ったの」と瑠璃姫が問いたです。

語り部4 ハヤトは母親の正体を知った日のことを語り始めるのだった。

語り部1 ある満月の晩のことである。

語り部2 ハヤトは月の光に目をさました。

語り部3 母がいない。

語り部4 ハヤトは母を捜しに森に出かけた。

語り部1 そして、森の奥で母を発見。

語り部2 次の瞬間、母は銀の鷹に変身するのであった。

語り部3 変身

語り部達 ジュワ！

語り部1 ついに母は自分の正体をハヤトに知られてしまった。

語り部2 母はなぜ自分が母親として今日までハヤトを育てたのか、そのわけを話すのであった。

語り部3 あれは、ハヤトがまだ赤ん坊のとき。

語り部4 ハヤトの本当の母親が、ハヤトを背負って森を歩いていた。

語り部1 そのときだ。母親は何かが畏にかかっているのを見つけた。

語り部2 それは、な、なんと、

語り部全員 銀の鷹。

語り部3 「まあかわいそう」

語り部4 母親は銀の鷹を不憫に思い、罌をはずして逃がそうとする。

語り部1 そのとき罌を仕掛けた盗賊が現れる。(語り部3・4が盗賊を演じる)

語り部2 「その獲物返してもらおうか」

語り部1 しかし、母親はその鷹を逃がしてやる。

語り部2 盗賊は怒った。

語り部1 「殺っちまえ」

盗賊が小刀で母を刺す動作。

語り部1・2 ずばっ！

語り部1 無情にも、ハヤトの母は殺されてしまった。

語り部2 自分のために死んでいったその女への恩返しに、

語り部3 銀の鷹は母親に化けてハヤトを育てたのだ。

語り部4 そして、正体を知られた今、別れの時がやってきた。

語り部1 「何も別れなくてもいいじゃないか」

語り部2 そう思うかも知れない。

語り部3 しかし、この手の物語では正体を知られたら別れなければならないと、相場が決まっている。

語り部4 昔話とか伝説はそういうものだ。

語り部1 別れ際に、母は言った。

語り部2 「もし、どうしても私が必要なときはこれを天に向かって投げなさい」

語り部3 母がハヤトに渡したのは。

語り部4 銀の羽であった。

語り部1 そして、母は銀の鷹となって空の彼方へ飛び去っていくのであった。

母とともに、語り部達が袖に去っていく。

瑠璃姫に話をしているハヤト。

ハヤト (朦朧として) 母さん。母さん。

瑠璃姫 ハヤト、お母さんからもらった銀の羽を見せてごらん。

ハヤトは懷からその羽を取り出す。(イメージで)。

瑠璃姫 この羽を空に向かって投げるとあの銀の鷹が現れるのね。

ハヤト (うなづく)

瑠璃姫がその羽を空に向かって投げる。
そのとき一陣の風が吹く。

瑠璃姫 待って。待ちなさい。

瑠璃姫がその羽を追いかけて舞台から去る。
それを見ている、ヤブレ、カブレ、小瑠璃。
しばらくして瑠璃姫が三人の前に戻ってくる。

瑠璃姫 さっ、帰るわよ。

ヤブレ 帰る？

瑠璃姫 この森は諦めたわ。

ヤブレ あ、諦めたんですか？！

カブレ (ハヤトをさして) こいつはどうします。

瑠璃姫 そのまま寝かせておきなさい。

カブレ わかりました。

瑠璃姫 (ヤブレに) あなた、

ヤブレ 瑠璃姫様、どうしたんですか。いつものようにヤブレって呼んでください。

瑠璃姫 ヤブレ、さっ、行くわよ。

瑠璃姫が家来達とともに帰って行く。

しばらくして、瑠璃姫が袖幕から顔を出し、すぐに顔を引っ込める。

次の瞬間、瑠璃姫ではなくハヤトの母が舞台に現れ、ハヤトの方に歩いていく。

母 (ハヤトに) かわいそうに。自白剤を飲まされたのね。でも大丈夫ここに下剤があるわ。
(「下剤」という言葉に、涼子が立ち上がる) この下剤はとっても利くのよ。さあ、これを飲んで。

母がハヤトにその薬を飲ませようとするその瞬間、涼子が叫ぶ(富山の薬売りとして)。

薬売り 待った！

母 …

涼子が富山の薬売りとなって母のところに歩いていく。

薬売り 私は富山の薬売り。お母さん、その薬を飲ませるはいけません。その薬を飲んでも息子さんはよくなりません。それどころか息子さんは下痢になってしまいます。あなたが飲

ませなくてはいけないのは毒を消す、解毒剤。さっ、ここにその解毒剤があります、これを飲ませるのです。

薬売りはハヤトに解毒剤を飲ませる(解毒剤はイメージ)。

薬売り これで大丈夫。

母 …

薬売り 私は富山の薬売り。

薬売りがナレーションの位置に歩いていく。

母は呆然と立っている。

その呆然とした姿を見て薬売りが戻ってくる。

薬売り あなた、どこかからだの調子がおかしいようだ。どれ、この薬をお飲みなさい(薬はイメージ)。

母 これは。

薬売り これは「七つ森」という薬。

母 「七つ森」？

薬売り この薬には七つ森を愛する人たちの熱い思いがつまっている。

母 …

薬売り さあ、飲みなさい。

母 [裕美] は少し考えた後、その薬を一気に飲む。

薬売り 気分は？

母 すっきりしました。

薬売り それはよかった。(目で「しっかり」という合図を送る)

母 (大きくうなづく)

薬売り 私は富山の薬売り。

薬売りはナレーションの位置に。

ハヤト (意識が戻って) 母さん？

母 (うなづく) もう大丈夫よ。さあ、あの人達が戻ってくる前に逃げましょう。

二人、歩いていく。

その時、瑠璃姫とその家来が現れる。

瑠璃姫 待ちなさい。
ハヤト 瑠璃姫。